

いうたらあかん
ディクシヨナリイ

③

中国語



中嶋嶺雄

或る日、編集部的女性Hさんから電話がかかってきて閉口一番、「面白半分」って雑誌ご存知ですか」とやられた。中国問題を研究している大学教師などは、今日の中国と同様に真面目一方なのだという有難い先人観があったのだろう。各国タブー語の連載特集だというので、今回の中国には政治的なタブー語がかなりあるはずだと思ってお引受けしたのだが、やがて届けられた「米語」篇、「露語」篇を見ると微に入り細にわたるセックス用語の氾濫ではないか。さて、困ってしまった。社会主義国でもソ連や東欧ならいざ知らず今日の中国でセックスの用語など思いもよらないし、隠語辞典などにもお目にかかっただけではない。その方面なら駒田信二氏のような碩学がいるのにと悔みつつ悪戦苦闘の末、私なりの中国版タブー語録がどうやらできあがったのです(発音表記の片カナは無気音、ひらがなは有気音としてできるだけ原音に近づけた)。

シウ・ヤン(修養へ養) 修養。今日の中国でもっとも典型的なタブー語であろう。中国のフルシチョフ(中国的赫魯曉夫)“として失脚した国家主席・劉少奇にちなむ言葉だからである。周知のように一九四〇年代前半の中国共産党は、延安整風運動のなかで党風を鍛え、党員のモラルを高めたのだが、そのとき指導的な役割を果たしたのが劉少奇であり、劉少奇の論文「共産党員の修養を論ずる」は整風文献に指定され、すべての党員が熟読したものである。だが、文化大革命で劉少奇が「反党・反革命分子」として断罪されて以来、劉少奇の修養論は「ブルジョア的な反動文献」、「ブルジョア利己主義の大毒草」だとされるにいたった。こうなると中国では徹底しており、『毛沢東選集』のなかで劉少奇の革命的功績を称えた個所が削除されたことはもとより、文革後に出た『新华(華)字典』(中国でもっとも公式かつ一般的な字典)最新版(一九七一年版)

からは「修養」という語そのものも削除されてしまった。『毛沢東語録』にも当初は「思想・意識・修養」という章があったが再訂版では、それが「誤った思想をただす」と改められ、この章のなかの劉少奇の言葉を引用した個所も削除された。中国を訪れて、「精神修養になりました」などは、ゆめゆめ言われぬよう。

ウェイ・ター・タ・リンシウ(伟へ偉) 偉大な指導者、偉大な領袖。この形容句は、今日の中国でタブーであるどころか、毛沢東にたいして必ず献ずべき言葉である。とくに文化大革命の時期には、「偉大な導師、偉大な領袖、偉大な統帥、偉大な舵手」と四つも「偉大」が重ねられたし、全中国どこへ行っても「偉大な領袖・毛主席万歳! 万歳! 万万歳」であった。ただし、「偉大な指導者」とか「偉大な領袖」という形容句を今日の中国において毛沢東以外の人物に用いることは絶対にタブーなのである。ところが、最近、わが日本外交はこのタブーを犯して大変な失敗をやった。もっとも、その非は外務省にあるというよりは、役人のつくった文案を屠籠に捨て自分で鉛筆なめなめ作文することをもって官僚政治を排することだとお考えらしい三木首相ご自身にあるようだが、一月の周恩来首相の死去に際して三木さんは公式の談話で「周恩来は中国の偉大な指導者」といったのである。去る四月初めの天安門事件に示されたように、中国民衆のなかに潜む「偉大な指導者・周恩来」のイメージに苛立っていた文革派・毛沢東側近は、三木首相にたいしてさぞかし苦々しく思ったことであろう。三木さんの弔電は『人民日報』では、アフリカの小さな国からの弔電と一緒に掲載されていた事実が、そのことを証明している。

とロツキ(托洛茨基) トロツキー。わが国の自称スターリン主義者のなかには毛沢東中国をいたく称讃するむきもあるようだが、今日の中国でトロツキーをいささかでも評価しようものなら大変なこ

とになろう。念のために、中国共産党創立五十周年記念(一九七一年)に際しての中国における公式のトロツキー評価を紹介しておく。「トロツキー(一八七九—一九四〇)年。トロツキー反革命匪賊一味の頭目で、レーニン主義の不倶戴天の敵。レーニンとボリシェビキ党に狂気のように反対した。……国外でのトロツキーは、世界の帝国主義と各国反動派が革命運動を破壊するためのけがらわしい道具になりさがった。まさにスターリンの指摘のように、トロツキーのやからは原則も思想もない暗殺者、破壊者、スパイ、人殺しという匪賊一味であり、外国のスパイ機関にやとわれて働く、労働者階級の不倶戴天の敵という匪賊一味である」(邦訳、『人民中国』一九七一年九月号)。

リーベン・チュインクウオウチウイ(日本軍へ軍) 国主義へ義) 日本軍国主義。日中国交樹立以前とくに六〇年安保の前後と一九六九—七一年頃は、すべての対日評価が日本軍国主義に帰せられ、中国の紙面にはこの言葉が連日溢れていたが、いまやタブー語になっている。ピンぼけした訪中団が「日本軍国主義」などと発言しようものなら、「ソ修社会帝国主義の覇権主義に備えて、日本はもっと軍備を強化すべきです」とお説教されること必定。

メイ・リー・ファントウんばイ(美日反动へ動) 派) 米日反动派。この言葉もいまやタブー。従って、「反対へ対」美日安全条約(日米安保条約反対)「も中国では口にしない方がいいスロীগンになってしまった。すべては中ソ対立のせいであろうが、時移れば中国も変わるもの。今日の中国はむしろ米日反动派との同盟を必要としている。水門事件のニクソンさんと並んで、金脈事件の田中さんは、いままも中国では評判がいい。

ティアオ・ユイ・タイ(釣へ釣) 魚(魚) 台) 尖閣列島のこと。ティアオ・ユイ・タオ「釣魚(島)魚」ともいう。六〇年代末から七

ページのページは、絶対口にしてはいけません。大きな声で読んだあと、忘れて下さい。

○年代初頭にかけて、中国がその領有権を主張してやまなかった尖閣列島について、最近の中国は黙して語らない。わが国の北方領土問題で盛んに声援をおくってくれる中国としては、当面、この問題には触れにくいのであろう。ここ当分は南シナ海の西沙群島、南沙群島をめぐるハノイとの領土紛争に力を注がねばならないからかもしれない。しかし、中国が尖閣列島の領有権主張をあきらめたわけでは決してない。「走資派」として失脚した鄧小平・前副首相ほどのものわがりのいい指導者でさえ、「日本との国交のとき、双方は言及することを避け、まず放置しておきましたが、われわれは永遠にこの中国の領土を放棄することはできません」(一九七四年十月二日の人民大会堂における華僑代表らとの会見)と述べている。

チーナ(支那)シナ。今日の中国にたいしては、いわずとしたたけ「支那」がタブーになった戦後のわが国でも「シナ」―「中国」―「中共」をめぐって、さんざん議論があった。もともと、私は戦後世代だし、中国を中共などとは一度も書いたことがないので、先日、ウイーンで開かれた国際シンポジウム「中国と国連」に出ている、ドイツやオーストリアの学者がさかんに「シナ」といつていたのには、いささか面くらった。ドイツ語では China はシナもしくはキナという。

ワン・パ・タン(忘八蛋)こん畜生、バツカヤロー。この間抜けめ。セックス用語が罵言に転用されることは、日本を除いて洋の東西に共通しているけれども、この言葉はかなり決定的な罵言であるから死ぬ覚悟で口にすべし。「忘八」も「王八」も同じで、本来は亀の俗称。亀の雄は交尾できないので蛇にたのんで雌と交わってもらう、という。そのようにひどいやつだということから、亀は「孝・梯・忠・信・礼・義・廉・恥」の「八(字)を忘れてる」(忘八)となり、発音が同じなので「王八」ともいうのである。「妻を

寝とられた間抜け男」を指すこともあり、「忘八蛋」をもっと強めていうときには「忘九蛋」「王九蛋」ともいうが、こんな罵言をあげせられたら、死ぬか生きるかも最後である。

クエイ(亀(龜))亀。馬鹿野郎。妻を人に姦せられて坐視する夫、ヒモ。日中兩國は「同文同種」なんていうのがいかに誤っているかをこの一字が示している。そもそも文法の構造だって中文は日本文と正反対でむしろ欧文に等しいのに、どうして「同文」であろうのか。さて、日本では「亀は万年」というように大層縁起のいい言葉なのに、中国では「亀甲文」というような場合以外は、最高に下卑た言葉であり、罵言でもある。「亀公」(姦婦の夫、バカヤロー)「亀孫(孫)」(とんでもねえ野郎)「亀頭(頭)」(妓夫)「亀摘(擷)下」(バカな奴め)というように、ろくな意味はない。田中慶太郎編の名著「支那文を読む為の漢字典」によると「俗に人を罵る詞として用ふ。唐の時、染戸は皆な緑頭布を着けたり。後、亀の頭は緑色たるに因り、緑頭布を着る者を目して亀と為す。染戸の妻女は皆な歌妓なり。故に又、妓院を開設し妻女の売淫を縦せる者を目して亀と為す」とある。

つアオ・ニイ・タ・マー(禽的媽)お前の母親をやってしまろぞ。米語、露語同様に、最大級の罵言である。「齊」(字の構成が面白い)は発音の同じ「操」「草」を用いる場合が多い。これらの語はいずれも交合する、性交するの意味であるが、fuck と同様あるいはそれ以上に口には出せない鄙猥な響きをもつ。つアオ・タン(禽蛋、操蛋、草蛋)も「こん畜生め!」といった意味ではあるが、言う者の品性を計られることを覚悟でやむにやまれぬときに出す言葉。一般のさわる Make Love の意味なら文字通りツオ・アイ(做愛)、「做」は「作」の俗字)という新語もあるようであり、ただたんにセックスするという意味ならツオ(做)もしくはカン(干(幹))

ともいう(「做」も「干」も本来「干する」という意味)。

つアオ(操)ファックする。ウォーターゲート事件でニクソン前大統領が大統領にはまことにふさわしくない下卑た言葉を独語していたことが明らかになったが、毛沢東主席が中国首脳の方もこれに負けてはいないようである。毛沢東自身「忘八蛋」なんていう言葉も使っているのだが、丘巻は、かつて「大躍進」政策にまっとうから反対して失脚した彭徳懐・国防部長との論争であり、天王山の廬山会議(一九五九年)では、お互いに最大級の罵言をあげあつたらしい。やがて毛沢東は一九六二年九月の「八期中中全会における講話」(『毛沢東思想万歳』)のなかで彭徳懐がそのとき「ニイ・つアオ・ラ・ウォー・スーシエ・ニアン・ニアン、ウォー・つアオ・ニイ・アルシエ・イエン・ニアン・プー・シン(你操了我四十天娘、我操你二十天娘不行?)」と罵つたと告白している。直訳すれば「お前は俺の母親を四十回もやっただ、俺がお前の母親を二十回やっつけていけないのか?」となるが、このような表現は、普通ならとても口に出せるものではない。かくのごとき大論戦のすえ、彭徳懐はついに失墜したのだが、同時に毛沢東も国家主席を劉少奇に譲って政治の第二線に引き下ろざるを得ず、再び権力に復帰するために文化大革命という激動が必要であったのである。中国の路線闘争、党内闘争つまり政争はかくのごとく凄まじくスケールも大きい。それにくらべれば金脈政変とか、ロッキード政変(起ると仮定して)などは可憐なものですなわ。

ピー(屍)女性の陰部。日本語の場合と同様、鄙猥なタブー語であるためか、さすが『新華字典』には出ていない。ピーリー・タ・バオ(屎里的宝)は、女陰のなかの宝で「宝物」の意味。

チーバ(鷄巴)陰莖。日本語の「ちんぽ」はここから来たという説もある。陰莖については日本語同様にモノ(物)という意味の「トッ

んシ(東西)を当てることもある。

チー・チエン(鷄姦)男色。ホモ。ウエイ・チエン(尾姦ともいう。バイリウ・ファンホワ(敗柳殘花)「枯れた柳の散り残りの花」の意味から妓女または不貞の妻、尻姦女を指す。

ター・イエチー(打野鷄(鷄))娼婦を買う。夜の女とセックスする。今日の中国には、夜鷹などまったくいないのだから、中国では絶対に口にしない言葉。「野鷄」は「野妓」ともいって、「夜渡娘」「妓女」などともに娼妓のこと。「妓院」「妓館」は妓楼、遊郭。「夜合資」「開兒錢」は花代、「妓園」は妓女にとりかこませること。だが、いずれも旧社会のことであって今日ではこの法度。それでは不満という反「毛沢東思想」的、反社会主義的な読者のために、香港あたりの例を若干記すと、

ター・フェイ・チー 打飛機(機)いわゆるスペシャルのこと。「飛機」は飛行機のことだから「打飛機」とは面白い。そのものズバリというのならツォー・フェイ・チー(坐飛機)「飛行機に乗る」といわねばならない。ダンスホール(舞厅(廳))の女性を Love Hotel にさそうのは、カイ・ファン(开(開)房)だがこれは広東語からきた言葉。

チン・びん・メイ(『金瓶梅』)中国三大奇書の一つ『金瓶梅』。五〇年代の『紅樓夢』論争以来若干の曲折はあったが『紅樓夢』も結局は禁書なのだから、『金瓶梅』が今日の中国でタブーでないはずはない。「金瓶梅」は周知のようにこれを読む者がそれぞれ独り愉しむべき密室文学の金字塔である。真の意味での日中文化交流のためには、いつの日か、「四疊半樓の下張」を中国へ輸出しなければならぬまい。

マオ・チュウシイ・ユイルウ(『毛主席語(語)录(録)』『毛沢東語録』)。この赤いビニール表紙の小冊子が世界一のベスト・セラーで

あることはいかんともしがたい。『人民日報』（一九六九年一月三日付）によると、『語録』が一面に普及しはじめた一九六六年から八年十一月までのあいだだけでも七億四千万冊が出版されたという。だが、この『語録』には当初、林彪の言葉が扉に付されていたが、現行版にはもとよりそれはない。「まえがき」も、人民解放軍総政治部の「まえがき」、林彪の「再版まえがき」と変遷したのち、これらら一切削除されるというように、政治の動きに沿った変遷を経てきた。かつて文化大革命の時期には、どこでも『語録』が朗読されたものだが、最近では誰も『語録』をもち歩いていない。毛沢東なき中国で『語録』が禁書になることはないだろうか？

てイエン（畑）日本語の畑。「辻」などと同様にこれはそもそも日本語。だから中国の字引には出ていないはずだが、すべてに毛沢東の權威がものをいう国柄、『新华字典』は『毛沢東選集』の言葉を原則としてすべて収録する方針なので、「畑」については「外）日本人姓名用字」として出ている。一方「辻」の方は出ていない。そのころは、かつて毛沢東は日本軍の畑六司令を非難したことがあったが、辻政信参謀には言及したことがないからである。

ラン・ピン（藍蘋）江青女史の女優時代の芸名。一九三〇年代後半、上海の映画女優だった藍蘋は、やがて延安入りして正妻のいた毛沢東と結婚することになったが、ソ連が最近発表した当時の二人の腕を組んだ写真を見ると、やはり若き日の藍蘋は大変な美人である。彼女のことを漢の呂后、唐の則天武后にたとえる見方もあるが、その答えが出るのは、『毛沢東以後』になってである。

ヤン・カイ・ホエイ（杨（楊）开（開）慧）毛沢東の二度目の夫人。毛沢東の恩師・楊昌濟の長女で大変な才媛だったという。毛沢東の最初の妻は父親が決めた結婚によるもので生活を共にしなかったというから、実質的には最初の夫人。一九二一年に熱烈な恋愛のすえ

結婚したが三〇年に彼女は長沙で国民党軍に殺された。去る四月の天安門事件で中国の民衆は、毛沢東のブライバシーや女性関係については一切タブーであるはずなのに「烈士・楊開慧を悼む」というブロードをかかげた。江青夫人にたいする痛烈な批判であった。ホー・シー・チェン（賀士珍）毛沢東の前夫人。彼女の名前は絶対にタブーである。一九二八年に井崗山の革命根拠地で毛沢東と結婚（毛沢東には当時、長沙に残してきた妻・楊開慧があった。世紀の長征を共にし、紅軍兵士からも親しまれたが藍蘋の出現により一九三七年に離婚。傷心を癒すため一時モスクワに行ったとの見方もあり、今日でも健在だという。それだけに北京の民衆は、今回の天安門事件に際しても彼女の名前だけは出さなかった。

チエ・バン・レン（接班人）後継者。誰もが毛沢東の後継者と目した劉少奇が文化大革命で打倒されたのち、六九年の中国共産党九大大会では党規約のなかに「林彪同志は毛沢東主席のもっとも親密な戦友であり、後継者である」と書きこまれた。だがその林彪は林彪異変以後、最大の「裏切り者・反革命分子・陰謀家」とされるにいたった。つい最近では、周恩来首相の後継者と目された鄧小平も失脚した。中国では誰もがいよいよ深刻に『毛沢東以後』を計量しつつある今日、やはりこの言葉はうっかり使えない。

ワン・シヨウ・ウー・チアン（万寿无（無）疆！）永遠の御長寿を！かつては皇帝にたいしてのみ用いたこの言葉は、いま毛主席にたいしてのみ使われる。当面の中国にとってもっとも切実な響きをもつ言葉であろう。私は昨冬、故宮（かつての紫禁城）を散策したとき、その偉容を背にして城壁にかかる毛沢東の写真と彼が住む中南海（かつての皇帝の住居）を遠望し、同時にこのスローガンを見出して、結局は『毛沢東皇帝』になってしまったのではないかと
思わないわけにはゆかなかった。